
不幸で不幸な不幸人

黒黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不幸で不幸な不幸人

【NZコード】

N9447P

【作者名】

黒黒

【あらすじ】

主人公はとにかく不幸。

不幸意外に何て言つたら良いか解らないほど不幸。

しかしその反面微妙な所で幸せ。

しかしやっぱり不幸。

そんな不幸になるために生まれたような主人公が不幸にも不幸な事に巻き込まれる不幸な物語。

大事な事なのでもう一度、不幸です。

もう一度言いましょう！不幸です。

不幸人は人じや有りません。（前書き）

主人公チートかも知れません。
ヒロインは決まっていない。

不幸人は人じや有りません。

おつす、オラジーく・・・

違います。そんなスリバーな人じやありません。

俺は普通の人、一般人、善良なる市民、だから今起きている状況はありえない。

どんな状況か？

それはね？

樂しい気分で旅行に出ていた俺、道に迷つて迷つて、

道に道一泊の旅泊、

卷之三

「マフィアに追われとんじやあああああああああー?」

「居たぞ！ こつちだ！！」

しかも追つてくる奴等も追つてくる奴等だ。

どんだけしつこいんだ！

俺は昔フランスで変な事件に巻き込まれて、現地の不良グループから逃げて、必死にパレルモへ逃つて放つてから逃げて

には自信があるってのに！

バキユツ！

・・・流石マフィアさんだが。チャカまで持つておけりやつんですか！？

俺は涙目で反転する。

行く先には強面のスーツの人たちが五人・・・

銃弾を打ち込んでくる。

しかし、俺はどう言う訳か銃を撃たれるのは意外と慣れてしまつて
いる・・・

銃の直線状から少し身をずらし走つていく。

俺の脇腹を掠めていく銃弾・・・あぶねつ！

十分に近づき一人目の顎先を殴る。

一人目・・・

そのまま氣を失つて倒れようとする奴を腕を掴み背負い投げで投げ
つける。

二人目・・・

振り向きざまに鳩尾に左拳を入れ、その手を引き右足でもう一人の
米神を蹴りぬく。

三人、四人・・・

そして最後の一人に殴りかかろうとする、が相手がナイフを持って
俺を刺そうとしてきた。

しかし俺のまったく誇りにならない不幸経験値は伊達じやねえ！
相手の手首を掴み捻り刃を俺じゃなく刺してきた奴の方に向ける。

ドスツ

・・・五人目・・・・・

「はあ、はあ、あ、危なかつた。死ぬかと・・・・・

・・・・・あれれ、六人目、八人目、九人目が居るぞ？

「くつそ！？」

俺は焦つて倒れている奴を持ち上げ盾にし、腰に引っ掛けている銃を抜き反撃する。

・・・・・まあ、射的は滅茶苦茶得意と言つて置こう。

「よし、今度こそ逃よ・・・・・」

おつと、バイクが二人乗りでコッチに向かっている。
片方はなにやら鉄パイプみたいな物を持っている。

・・・・・フタリノリハイケマセンヨ？

「うおおおー！？」

俺は慌てて頭を下げる。

頭の上を何かが通つたよ！今！？

Uターンして来てまた俺の頭に殴りかかる。

俺はそれを避けつつ運転している方をラリアットで引きずり降ろす。
コントロールを失つたバイクは鉄パイプを持っている奴と一緒に横転した。

「！」、今度こそ逃げた・・・・・

絶望した。今置かれている状況と自分の運の悪さに絶望した！！！

俺の前にはざつと十名ほどの銃を構えた人が居る。
へ~さつきみたいに避けるつて?

無理無理無理無理! 一人と十人の差、これいかに!

「GO TO HELL!」

俺は蜂の巣にされました。

・・・・・
「そう言ひ訳で、俺の名前は『滝音 無音』と言います。よろしく。」

「どう言ひ訳ですか? それと誰に向かつて言ひているんですか?」

・・・・・なんだコイツ、ノリ悪い。

金髪でワンピースみたいな着ている女のヒトが俺に向ひつ。

「うるさいな。カメラ目線は大事だろ?」

「カメラありませんし。」

「で、平凡で心優しい不幸に塗れた一般市民(故)に何か用ですか?
?」

「身長195cm、顔には刃物で付いた傷跡、強面、握力、右測定

不能、左測定不能（高校2年生時）現在18歳、高校の夏休み、腕力は大型トラック片手でひっくり返すほど。

持久力は丸一日走つても汗一つかかない、いつも不幸が付きまとい不良やその筋の人々喧嘩を売られたりして、最早地域一帯では誰も喧嘩を売らないような人のどこいら辺が平凡な一般市民に成るのでしょつか？」

「握力測定はきっと間違いだつたんだよ。振り切れてあの針が曲がるなんて有り得ない！」

「うん、きっと螺子が緩んで……」

「ちなみに貴方が測定直前に、貴方が緩んでいたと言つていた螺子は同級生の嫌がらせによつてきつと締められていてその同級生が顔を真つ青にしていた事は知つていますか？」

・・・・え、なにそれ。

「こんな貴方が何故学校で付き合いたい男子ブツチギリの一位だったか気になります。」

「きっと集計間違いです。」

「じゃあ貴方が告白された回数と周りの男子との差をグラフにして・・・」

「すいません、やめてくださいーーーかきっと氣の迷いなんだよーーーちゃんと俺の事見てないから・・・」

「貴方つて某10万3千冊の主人公に似てますよね。困っている人助けて、フラグ建てて、それを気がつかない間に増築していくと言

う天然フラグメーカー。」

・・・・・ そう言えればなにこの人俺の個人情報知つてんの?
身長だつて最近計つてなかつたのに・・・・
ハツ！？ま、まさか、スt

「ストカーじゃありませんのであしからず。」

え、なにこの人。心読んでる、怖い。

「一応管理者なので、ヒトの個人情報は大体把握できていたりします。ヒトは天使とか言われますけど」

「天使さんでしたか。へ~」

「そうですね。で、貴方は生きている間に積んできた善行が称えられもう一回目の生を受ける事になりました。そこで、次に貴方が生き返ると言うか転生と言つか。その場所が下手したらすぐ死ぬんでそれじゃ面白くないと言う神様連合の意思で貴方に少し能力を授与する事になりました。

右手に天使の力、左手に悪魔の力が付与されます。」

・・・・・なんかあ、よく解らんのう。

「行き成り老け込まないでください。
そうだ、不老も追加されますから。
まあ、大丈夫でしょうけどね。

見た目の年齢は変えられますから。

天使の力は貴方の体の耐久力、自己治癒力を上げます。

具体的に言えば上空300km程から転落しても死にません。

骨折も押さえときや 2、3秒で治ります。

悪魔の力はとにかく力が強くなります。後身体能力も上がりります。貴方の場合元々の力が強いんでチヨット鍛えれば邪神クラスでもがんばれば倒せるんじゃないですか？」

・・・・なにそれ、シンプルなのにチート？

つーか300kmつてスペースシャトルが廻ってるといひじゃねえーの？

無重力じゃん。

「重力はありますよ。ギリギリ。

ちなみに普通だつたらこんなふうにはなりません。普通のヒトがこの力手に入れても精々下級の魔物を倒せるくらいです。しかしチート過ぎるのも面白くないと言つ事で氣、魔力は使えません。

あ、でも空は飛べますよ？翼出せるよつこしますから。右が天使で左は悪魔の羽だけど……

バランス悪っ！！

畜生、どうせだつたら統一しちよ・・・

「ブレンドして灰色の羽つてのも出来ますけどね。と言つからちゃんと喋つてくれません？

普通心読まれてからは自分で喋るんですが。」

「喋るより考えるだけで伝わるつて樂じやね？」

む、なんだその微妙な顔は。

「はあ、では天使と悪魔の力を移植します。

激痛が走りますんで我慢してください。」

「ちゅー・わつこつて普通『痛くないですか～？』とか言ひんじやなこのかよ～？」

「嘘偽りないかんですか。これでも天使です。嘘はつきません。
・・・たぶん」

「なんだそのたぶん？」「…

口論しつゝると紅い宝石と蒼い宝石が上から降りてきた。

「はーい、じゃあー、2の3で行きます。埋め込む場所はどこが良いですか？」

肩、手の甲、それとも…の…腕？」

「アハハハのせもつチヨット違つ時ひまつひまつじやなこいつすか？」

「アハハハのせもつチヨット違つ時ひまつひまつじやなこいつすか？」

・・・・・

「いえ別に。」

「なんですか今の変な間は。
まあ良いです。じゃあ方にやつちやこめすよ～。
はー、1、2…。」

「こつでええええええええええ～？」

「言つたじやないですか。痛いつて。」

いやいやいや、俺が驚いてるのはアンタが3じやなくて2のタイミングで俺の肩に変なもん埋め込んでくれやがったからなんですけどねえ！？

肩には紅いのと蒼い宝石が埋め込まれ。

変な羽みたいな刺青が・・・・。

天使のほうは白い羽のマーク、とその後に続く良く解らぬ言語や語彙で悪魔の方には黒い羽のマーク、こちらも天使のほうと回りつけられたりして、意味が解らない感じで書いてある。

マークの羅列。

悪魔の方は腕に包帯を巻いていた。腕に包帯を見たいのをもうつた。

「まあまあ、めんどくさい事は置いておいて。あと一応意外と便利な魔法具あげます。

はい、これ。

これでサービス終わり。」

「おこおこ、これをビリビリと~。」

「腕に付けてください。その使い方をマスターするとすんごい便利ですよ？」

凄く伸びますし、剣みたいに斬れますし、寄せ集めて盾にも槍にもハンマーにも出来ますし。

あ、行く世界は教えません。

まあ、気とか魔力とか言つている時点で想像してください。いや、がんばつてください。

心の隅っこの方で小さく応援してくるよつた気がしますよ~。」

俺の意識は急激に薄れていった・・・・
と言つたなんだそれ！？結局ほとんど応援してねえーじゃん！
ああ、意識が遠のくう〜〜

そんな事があつたのは覚えてる。
でもなぜ、よりによつてスタートが・・・・・

「こんな竜が居る所なんだよーーー！」

しかも無駄に強そ うなんだよ！

なにアレ！あの爪！俺なんて細みたく引き裂かれんじゃねえの！？

「くそー・・・そりゃ飛べるって言つてたな。」

ひとつあえず翼よ引ひを念じてみる。

「おお、
でた。」

思つたほどバランスは悪くねえもんだな。

俺の背中には鳥みたいな黒い羽と、その正反対の色を持つ白い翼が現われた。

「 I can fly . . . ヘブツ ! ? 」

なん、だと？ 飛べない！

飛べない豚はただの b . . .

いや止めておこいつ。今はそれどこにじやない！

（飛んだ事も無いのに飛べる訳無いでしょう。人生そんなに甘くな
いですよ。）

くつそ！ それもそつか！

（あ～、あと飛ばす座標間違えました。つーか、ずれました。天
使の転移術を搖るがすほどの不幸つてなんですか？ ある意味その運
がチートです。）

そ、そこまで運悪いのか。俺は！

（ハイ、疫病神が憑いた所でそんな事にはならないんですけどねえ？
ま、がんばつて竜討伐してください。じや）

さてどうする？

- 1 . このまま逃げる。
- 2 . 戦う。
- 3 . 話し合ひ。
- 4 . いざぎよく食べられる。
- 5 . モンスターボール。

うん、俺ってバカ？
なんだこの選択肢！

1、2、までは許そ。

3、4、5！なんじゃこりや！？バカにしどんのか？

くそつ！此処は・・・・2番！！

俺は振り向きざまに跳躍しアッパーをする。

・・・・あれ？なんかすごい勢いですごい高さまできてんだけど…？

俺は竜の腹に当てるつもりが顎に当たつてしまつた。
いや良いんだけど。

ズズンツ！

竜は倒れた！

・・・これからどうしよう。

とりあえずこの翼の制御とこの包帯の扱いと力の制御が出来るようになつてから考えよう。

こうしてなんだかグダグダのうちに俺の第一の人生は始ました。

・・・そもそもここは何の世界だ？

♪10年後♪

森の入り口・・・・

「やれやれ、出張でこんなに遠い所に来るなんて久しぶりだ。
でも依頼内容、これ本当なのかなあ。」

白いスーツを着たタバコを吸つている男が居た。
そして男が除いている紙には

『森に住み込みその森の魔物を率いている人間（？）が居るので捕縛して欲しい。』

「・・・・魔物つて人になつく物なのかなあ。」

そつ言い残しタバコをふかしながら森の置くへ歩いていくのであつた。

つづく

不幸人は旅に出ます。

s i d e 無音

アレから何年たつたんだろうか。

少なくとも5年以上は経っている。つーかそこから数えてない。ずっと修行して飛べる様にもなつたし、力加減も出来るようになつたし、包帯（？）みたいな魔法具も扱えるようになつてきた。でも言われたとおり気や魔法は使えないみたいだ。

使えないだけで魔力も氣もあることにはある。

存在を感じる事はできるが体の強化が出来ない。まあ、それについてはもう考えたのだが。

修行に関してはおふざけで感謝の正拳突き10000本とかやつてみた。

他にも重い背負いながら森の中を50000週とか？

あと変わった事は・・・・・髪の色が赤くなつた。あと髪を切つてないから凄く長くなつてきてる。

人と話さないから言葉の発音が怪しくなつてきている。

それと此処に来た時に倒した竜がちつちやくなつてしまつた、子猫くらいに

しかもなんか懐かれてしまつたのか俺の頭の上から離れない。つーか、取ろうとすると爪引っ掛けてきて痛い。

それとこの森の生態系の頂点に立つた！

・・・・森の中のトップって言つてもねえ？

俺が狩りに行く時とか何匹か魔獣が付く様にもなつてしまつた。何故だ。

身体的な変化は・・・」の間で「ポン」と岩割つたな。
アレの片付けしてないや。誰か転ぶかも・・・。
後身体年齢が変えられるって言つてたから変えてみた。
年齢換算で16歳くらい?でも187cmくらい身長有るんだけど・
・・

まあ、別におかしくないだろ?「うん、おかしくないおかしくない。

「ペギヤウ!」

「・・・・腹へったのか?」飯獲りに行くか。」

「ギャウ!」

俺は羽根を出して飛び立つた。

s.i.d.e白いスーツの男

それにしても何故こんな任務が周つて来たんだろうか?
こつ言う任務は普段は他に廻されるんだけどな。

「ん、あつと。なんだこれ」

明らかに故意に壊された岩の破片が散らかっていた。

「いや辺に住む魔獣の仕業かな?」

そう言つていると魔力を感じられたので僕は上を見上げた。

「・・・・鳥?いや、人!?」

アレはなんだ？鳥族か？

いやでもこんな所に鳥族の集落は無いはず・・・
コヅチに来る！？

s i d e 無音

久方ぶりの人だ。

最近狩人の人とかに会つても逃げられてしまつから少し悲しい。

「お前、だれ？」

「僕はタカミチ・ト・高畑と書つんだ。君は？」

うつわ！タカミチだよー言われてみれば・・・でも少し若い氣も・・・

そつかそつか、でもこの世界はネギマーの世界か。今原作何年前なんだろうか？それとももつ始まつてる？でもタカミチが若い氣もするし・・・そつ言えば何しにきたんだ？

「俺、滝音 無音、コイツ、レイ、何しにきた？」

レイつて竜の名前ね？

「え～と、君を捕まえに、かなあ？あ、でもとりえずついて来てくれるんだつたら拘束もしないけど。」

・・・は？俺を捕まえに？何故？俺なんか悪い事したか？

「俺、何か、悪い事、した？」

「・・・悪い事はしていないんだと黙つけどね。此処からあまり遠くない村からの依頼でね。怖がつていいみたいないなんだよ、君の事を」

あ～、確かに思い当たる節が無いわけじゃない。

「わかった、ついでこぐ。」

「じゃあ行こうか。」

「飛んで、行く」

ちんたら歩つてられるかよ

「うわっ！？」ちよ、待つて……。」

俺はタカミチの腕を掴んで町まで飛んでいった。

～20分後～

「この子が森の化け物の正体？」

「はあ、たぶんそうだと思いますけど……。」

なんかお爺さんと話している。依頼主があの人なんだろ？
む、こっち来た

「君、歳いくつだい？」

「16歳、くらい。」

・・・む、なんだその顔は、悪かつたなでかくて。

君はいつからあの森に居たのかな?」

い。少なくとも、5年以上、9年?10年?・・・そのへう

む、よくよく考えてみるとおかしくないか？」これだと6歳頃から森に住んでいた事になる・・・。
ま、いつか。

卷之三

よくなかった！！なんか重い！！空気が重いいい！！

そんな事を思つていたら何か知らんがこの村の村長さんとタカミチの話が終わつたらしい。

「それでは村長、この子はとりあえず私の知り合いの所へ預けようと思いますが、よろしいでしょうか？」

「ええ、よろしく頼みます。

「私達が気づけなかつたせいです」と一人で呟たなんて、それどころか恐れてしまつていたなんて・・・本当にすまなかつたね。」

おお、なんか本当にシリアルモードだ！

まじでー、いつの空気嫌いなんだよおー

ゲームとかマンガとかやっててもなんかいう言つ雰囲気の時、

ぐつ、と胸の置くが、ぐつ、と
ああ、嫌だなんか。

「・・・・・別に、いい。」

ああ、なんか心なしか声が震えている気がする。

「幸い此処はゲートからもあまり遠くない、早速行こうつか。」

「行く、どいへ？」

「世界、日本の麻帆良学園だ。」

まじですか？

そして俺は、長いのか短いのか解らない森でのサバイバル生活に別れを告げて麻帆良学園へと赴くのであった。

sideタカラミチ

森で見つけた彼は驚く事に6歳ほどからあの森に居たと言つ事がわかつた。

どうやつて生きてきたのか。どんなに辛かつたのか想像できない。だからこそ僕は彼にはこれからでもちゃんと過ごして欲しいと思つ。

「よし、ついた！」これが麻帆良学園都市だ・・・・・つて、あれ？
無音くん！？」

・・・・まさか、迷子？

とつあえず学園長に会って行くとは思つて置いたから学園長室に向かってくれるかな・・・

s i d e 無音

麻帆良d e 迷子...h e y...!

・・・いやー、何年も人里出でないと人混みつて凄いですね！タカミチについて行こうとしてんのこどんどん引き離されるの。いやー、どうしようつ！！！

まー、悩んでも仕方が無い。

学園長室に行くとか行つてたし、まあ道を聞いてりや行けるだろつ。

「それにしても、広い。喋るの、慣れない。・・・とりあえず、道、聞く。」

うう、なんか変だ。後2、3日躊躇つてれば慣れてくるはずなんだけど・・・

それよりまず道、道を聞かなくちゃ。や。お、人発見！・・・

「お嬢さん、道、聞きたい。」

「ん？ええよ~」

む、和む子だな。

「学園長室、わかる？」

「ん~？お兄さん、おじいちゃんに用があるん？」

・・・・O・J・H・I・T・Y・A・N・?

まさか、近衛 木乃香ちゃん?

「・・・・・学園長、お孫さん?」

「ルーフやベーベーのかまつんよ。」

「何歳?」

「12歳や。今年中學1年生になつたんや」

・・・・間違いない。と、言つ事は、原作1年前?
まあ、後で考えよつ。

「学園長室、行きたい。道、教えて欲しい。」

「じやあ、いひや～」

そう言つて走つていいく木乃香ちゃん。
俺も早くついていかないと迷うな。

「高畠センセ、ここにちわ～」

・・・・・

「やあ、JJのかくんと無音くん…心配したんだよ。ちやんとつっこめてくれなきや。」

「JJめん、人混み、慣れてない。
JJのかちゃん。案内、ありがと。」

「じゅいたしまして、じゃあ、ウチはいくわ～」

やつ語つてまたパタパタと走つていつた。元気な子だ。

「じゃあ、入るつか?」

「解つた。」

タカミチは扉を開ける。

・・・・そこには人類の深さを物語る人が居た・・・・

これが人類と言つカテゴリなんだよな・・・・

「ふおつふおつふお、その子が高畠君の語つていた子かね?」

「滝音 無音、16歳。」

「ふむ、近衛 近右衛門じや。それで、無音君。事の顛末は聞いておるが。
君はじゅうしたい?君が臨むのなら学校へ通つてもいいよつ手配しよう。」

「・・・・勉強、できる。今更、しなくとも、大丈夫。」

「じゃれるへ、ひのけじやへ。」

「大学とか言ひの、卒業、できるへりこ」

そ、勉強は無駄に出来たのだ。

「ふお？なぜ大学なんてしつとるんじや？」

「6歳まで、普通に暮らしてた。勉強は6歳で、修めた。」

テキターだけどな？

「ふむ、魔獣がすんでこる森で生活していたんじやったのひへ。」

「あの森、俺、一番」

・・・なんか嫌な笑みを浮かべたぞ口イツ。

はつー？ま、まさか！

「広域指導員に決定じやの。それと教師をやつて貰いたい。」

・・・こんの人外め！

俺は慌ててタカミチのほうを見る。

しかしあちらも慌てて俺から眼をそらす。

あ、てめえまさか本当に人手不足だから少しでも困ってくれたらうれしい、的なこと考えてやがるなー？

「ま、まあ、」の学園広いし慣れるためこもれよつじ良いんじやないかい？」

おーい、俺の田を見て貰つてくれるかそつまつ」とは？

「ふおつふおつふお、じゃあ決定じゃの。高畠君、彼のこの学園を
じょうかいしてやつてくれ。ワシは手続きをする。」

「解りました。じゃあ行こうか。無音君」

俺の意思関係ないんすか？

まあ、いいや。俺はタカミチの後ろに立つていいこうとした。が・・・。
なんか良く解らん人混みに流されまたもはぐれてしまつのでした
・・・とりあえず適当に廻つてみるか。

「世界樹・・・でかいな。」

夕焼けがバックになつていて綺麗だ。
かなり遠い筈なのに此処から見えるな。
たしかゲートが在るんだつけか？ま、どうでも良いか。

「あれ～？やつきのお兄さんやん。」

「！」のかちゃん？」

おお、また会えた！これは奇跡。

「また、道、迷つた。タカミチ、ビロー、解る？」

「うつま～、なんかやつぱり喋り方変だー。
早急に喋るのに慣れんど・・・。

「また迷ったん?じゃあ、探しにーーー。」

ええこやー、癒されるし。
もう本当に良い子だ。」

そして俺はこのかちやんこいつに行こうとしたが。

「・・・・あれ?居ない。」

気付いてみればあたりに人の気配が無い。
森に住んでいた俺はこいつの言つことには敏感だ。

「貴様、何者だ?」

「おお、このパターン。桜咲さんですか。そーなんですね?そーですか。」

「俺、滝音 無音。今日、学園、来た。」

「お嬢様を浚づ為にか!」

なんでやつ女直な思考なのでしょう?

「違う。タカミチ、探す、手伝つて貰おうとした。」

お、やつと話すの慣れてきた。

「何をぬけぬけとー貴様みたいな奴が高畠先生の知り合いな訳無か
るつーー。」

そう言うと俺に向かつて大きな太刀で斬り付けてきた！？
つか意外と失礼だな！？

「くつ！あぶないな。」

「避けたか！だが次は外さん！雷光剣！！」

「ちつ、めんどくせえ。」

雷をまとった剣が振り下ろされる。

そんなモン森に来た竜種の魔法に比べたら爪楊枝なみだ！
俺は膝を曲げ思い切り前へ進む。
瞬動つてやつだ。

「なに！？」

「フツ！」

勢い良く背後に立つた俺は背中を蹴り飛ばす。
手加減はします。

「くつ！？え・・・うわああああああああ！？」

・・・やべつ、加減間違えた。

10m程

飛んで行つたところで地面に落ち氣絶したようだ。

「・・・手加減の練習してたのに。あ、あの森の奴らが強すぎたのか。

そりや吹つ飛ぶな。」

・・・・・殺氣がするな～、何でだらつか?
とつあえず～

「ロシチか！」

魔法具の包帯で弾く。

・・・・・なんかよくよく見てみるとあれだ、カゲタロウ（～）の技
に似てる。

「ついて、そんな事考えてる場合じゃねえか。」

そつ言つてゐる間にも的確に俺に打ち込んでくる。
龍宮わんですよねえ？あなた

「・・・タカミチ、何故に来ないし。」

とりあえず俺は逃走を計りました。

不幸人の弱点は・・・・。

側龍宮

なんだ、アレは……」

さつきのアレは何だったのだろうか。

重かない表情 暗い瞳 まるで機械のよがモノ。

魔族？そんな生易しい毛のじゃない。

自分の絶対の自信のある魔眼を疑つた。

モードル・アーティスト

信じえるモノではなかつたのだ。

人の形をしてゐるからこそまだ得体の知れない怖さが増してきが

少し震えているのを押し込め、仕事仲間の所へ急ぐ。
敵としてアレに出会わないことを信じて。

side 無音

「俺、敵、違う。」

皆様元気でしょ うか？

僕は元気です
・・・・元気ですかね?

今がンケ口勝け女掃除姫は因まれておりますあと始り掛けてると思つた二の口調。戯闘が終つた

まあいい。それより・・・

「よくもそんな抜けぬけとーすでに龍宮さんからの伝令はこの学園の魔法生徒、及び魔法先生に回りました。」

・・・どうしてこう人の話を聞かない人が多いかねえ？
もつチヨット耳を傾けてくれよ。

「行くぞ！――」

そうガングロが言つて、三人は動き出した。

まずガングロが先行して俺に向かい銃弾を三発。
それに平行し、ナイフを逆手持ちで近づいてくる。

その後ろで掃除娘が詠唱を始め、脱げ女も影の使い魔を5体出してから詠唱に入る。

あ～、めんどくせえなあ。

目の前の出来事だけに集中する・・・

まずはガングロ。

銃弾を包帯で絡めとり、一気に俺も加速する。
慌ててナイフで斬ろうとしてきたが、その手首を手刀で打ち据える。
ナイフを取り落としたのを見計らい、その手を引き付け背負い投げ。
すぐ後ろに迫つていた使い魔を2体ほど押しつぶす。

・・・あと接近3体に遠距離2人。

一番近くに居た使い魔の後頭部を掴み思い切り膝蹴りをする。
着地した瞬間真横に来ていた奴に裏拳で吹き飛ばし、その勢いでもう一体蹴り飛ばす。

・・・・あと二人

「影の百槍！」

「紅き焰！」

しかし詠唱は完成してしまったようだ。

脱げ女の攻撃は包帯で迎撃する。

問題は炎。

この世界に来てから何年経つか知らないが解った事がある。

俺は決してチートじゃない。

天使に体が有り得ないほど頑丈になるとか言われたが、アレは正確じゃない。

実際の所を言えば、衝撃、打撃系に関してのことを言っていたのだ。
しかも魔力的な処置は成されていないので打撃でも魔力が使ってあるとそれなりのダメージになる。

しかし、俺の不幸経験値をなめるな！！

あの森じや、火を噴かない奴の方が珍しいんだよ！！

俺の努力を見るが良い！！

「ハアツ！！」

ドオオオオオオオン！！！

はつきり言つてすごいな。

俺が突き出した拳によつて空気が振るえ炎をかき消した。
お？掃除娘が倒れた。拳圧があつちまで行つてたかな？

「メイ！よくも！！」

「怒っている所悪いが。」

「え？」

俺っちが瞬動使えないとでも？

脱げ女の横に立つている俺。

慌てて使い魔を出そうとしていたが手刀で意識を刈り取る。

「终わり、めんどくさい、手加減、難しい。」

・・・・また口調が、まあ仕方ない。
む、また人の気配！？

そう振り向いたら十字架が飞んできました。

「うーーー！」

左手に当たった・・・・へ？

ドサッ

左手が・・・・急に、重・・・・く！？

え！なになに！？まさか悪魔の左手ってそんな性質まで悪魔に何の！？

十字架ダメ系ですか！淨化されちゃうんですかあ！？

恨みがましく投げられてきた方向を見てみる。

・・・なんかポカーンとしてる人が2人。

無表情で肩車されてる子が一人。

「へ？あ、あれ？なんでガンドルフィーーーせんせー達あつさり倒し

た人がシャークティのゲームで言えば弱攻撃で倒れるの?」

・・・・ああ、そういひとね?

でもどうしようかなー。左手あと10分は動かなそうだし。右手は動くけど。

「と、とつあえず美空、高畠先生と学園長に連絡を。」

「ラジヤー、えーと、携帯携帯・・・・・」

まあ、よくよく考えてみれば俺つてば別に何もしなくても敵じゃないんだから良いんだけどさあ?

「え、へ? お客? え、高畠先生が・・・・・はい。えへ、シャークティ?」

「何ですか美空。その何かを壊した後に誰かに見つかったような顔は・・・・・」

「実は・・・・・」

「・・・・・まずいですね。で、高畠先生は?」

「今向かって来てて、もつ着くつて話ですけど・・・・・」

「無音君! - - -」

「む、タカミチ。お前、遅い。歩くの、早い。」

「「めん」めん、怪我は?」

「無い、でも動けない。」

ホントに体がだるい。動きたくない。

「・・・ちょっと『めんね』？」

む、なんだタカミチ。人の額に触れてきて。

「熱い。とりあえず保健室へ・・・」

あ〜、確かに、頭痛いかも・・・
それに少し寒気も・・・

あと眠気が・・・

そして意識が沈んでいくのであった。

・・・・眩しい。朝か？

「やあ、起きたね。」

「む、タカミチ。」

「急に環境が変わつて疲れてた所に戦闘だからね。体調を崩したんだろう。」

「確かに、疲れた。話、聞かない奴、多すぎ。」

「ハハハハハ、それはなんとも言えないな。」

「俺、怒った。昨日の話、教師の方、断る。」

「ハ、ハハハ、はあ。まあ、しようがないね。学園長も謝つてたけどだし。

でもその気に成つてくれるんだつたらやつてくれるのうれしいな。」

「知らない。」

まあ、原作が始まるとかだつたりせつてやらん事も無む事じもあらず、だ。

広域指導員はなんか楽そつだし。

それにして、喧嘩止める時とかビリシ。

手加減・・・・・まあ何とか成るか。

そう言えば

「ハハハ、セニ?」

「ハハハは君の家だよ。これからはハハハ住んでくれ。ハ飯とかは一応店とか有るけど・・・・・

「いい、作れる。」

「せうか。じゃあ今日せうつくり休んでくれ。熱もトガつていいようだけど無理はよくないからね。ああ、明日の7時位に学園長室に来ててくれるかい?」

「解った。」

「じゃあ、僕は帰るよ。」

「ごめん、迷惑かけた。」

「ハハハ、気にしなくて良いさ。じゃあね。」

・・・・行つたか。

それにして、眠いなあ。
・・・グウ。

side 学園長

ふむ、これは失敗じやのつ。

来年の事を考え彼にはあのクラスを担当してもらいたかったんじやが。

「こんな結果になつては文句は言えんからのお。まあ広域指導のほうを受けてくれるだけでもよしとしよう。」

・・・・それにしても。彼の戦闘力。

一度確かめてみたい所じやのお。

フォツフォツフォツフォツフォツフォツフォツ。

その後怪しい笑い声が学園長室から響き渡つていたと言つ。

「ペギュ～！」

「む、レイ、おはよ。起してくれてたのか？」

・・・・今は、A・M・6・47・・・・・

「遅刻・・・」

俺は即ちも留まらぬ速さで着替えレイを頭に載せ学園長室へ急いだ。ヤバイヤバイヤバイヤバイ！仮にも雇つてもう立場の人間が遅刻なんて事をしたらそれこそ品性が疑われる・・・って！？

「危ない！」

「へ？ひやあああああああ！？」

「ゴシヤアアアアアアンッ！」

「ちょ、ちょっと木乃香大丈夫！？」

「うう、大丈夫や。そつちはだいじょーぶ？」

「このかちやんだったのか。

うつー？中途半端に避けようとしたから頭ぶつけたか？くうくうする・・・・

「あれ～、おにいさん「ちょっとアンターぶつかつ」といて謝りもしないで言ひのー！？」あ、アスナー！」

う、ぐぐうう！？え、襟を持つな。頭を振るな。し、死ぬ・・・・

・・・ガクツ

「あ、アスナ～！？その人気い失つとるからーそれに知つてゐる人や！」

「へ？え、で、でも・・・「無音君！？あ、アスナ君。チョット彼をコツチに渡してくれ！」た、高畠先生！？」

s.i.d.e タカラミチ

無音君が遅い。途中で何かあつたのかな？

「学園長。一応様子を見てきます。」

「ふむ、そうしてくれ。彼は何だか不幸な星の元に生まれてきてるよつじやから何かに巻き込まれてるやもしれん。」

まあ、どんなに不幸な人でもそこまで朝から厄介な事があるとも思えないが・・・・

そして通学路。

彼が居ないか周りを見ながら歩いている。
すると・・・・

「あれ～、おにいさ「ちょっとアンタ～ぶつかつ」といて謝りもしないって言つの！？」あ、アスナ～！」

この声はアスナ君とこのか君か・・・・
いつも少しだけ騒がしい自分が受け持つクラスの生徒の声を聞きそ

ちりを振り向く・・・

「あ、アスナ～！？その人氣い失つとるからーそれに知つてる人や
！」

「へ？え、で、でも・・・「無音君！？あ、アスナ君。チヨツト彼
をコツチに渡してくれ！」た、高畠先生！？」

油断していた。彼の不幸は本当に推し量れないな・・・・・
氣を失つてるだけか。

「ギャウー・」

「・・・・レイ君。なんでここに居るんだい？」

「きやー、かわええー」

彼の上には彼の使い魔？をこのか君が持ち上げた。
魔法の秘匿もあつたもんじやない。

でも幸いこの学園では色んなモノがありすぎてはつきり言つてこん
なもんじやばれない。

「うう、うーん。はつ！？」

「お田覚めかい？ホント君は色んな事に巻き込まれるねえ？」

「俺、臨んでるわけ、違う。急いでた、ぶつかつた。」

「やうだつたのか。このか君にアスナ君怪我は無かつたのかい？」

「え、ぶつかったのはこのかだったんで……」

「ウチは大丈夫や。無音さんは大丈夫なん?」

「大丈夫……ん?俺、名前、言つた?」

「高畠せんせーが呼んでたの覚えとつたんや。」

早速知り合いも出来ているみたいだね。

「あのー」

「……なに?」

「いじめんなさい。やりすぎたわ。」

「……?」

「……ああ、覚えてないな。」

あ、もうこんな時間が。

「いじめん一人とも。僕達は少し行かなくちゃならないから。

HRの時にね。行くよ無音君。」

「じゃあね。」

「え、あ、ちよ。」の子……」

・・・・それにして、こんな感じで広域指導員が無事に出来るの
だね?か?

疲労で倒れるとか洒落にならないんだけどなあ・・・

一人悩みを抱えるタカミチでした。

「タカミチ」

「ん?どうしたんだい?無音君。」

「レイ、居ない。知らない?」

「え、ー?」

教室にて・・・

「このか、それ何?」

「ちょっと知ってるおにーちゃんのペットなんやけど返しそびれてもーて。」

「かわーーですー。」

「なにこれ?鳥かな?」

此処までが一般生徒。

「(おい、刹那。アレ竜種だぞ?)」

「（な、なに！？なんでそんなモンが居るんだー！）」

・・・・・

「ハハハハハハハハ」

「タカミチ、壊れるな。」

訂正、一人で悩みとストレスを多大に抱え込むタカミチでした。

不幸人の弱点は・・・・。（後書き）

弱点は十字架でした。

不幸人のステータス。と、不幸人の質問地獄。一本立てです？

名前：滝音 タキオト

無音 ムオン

年齢：一応16歳？

身長：187cm

能力：悪魔の左腕・握力、腕力、脚力、運動神経、その他諸々が凶悪なほどに強くなる。手加減練習中。左肩のあたりから黒い羽が出来る。3本が限界。十字架で力が失われるらしい。ある意味シスター・シャークティは天敵。

天使の右腕：回復力、体の強度が上昇。天使さん曰く上空300kmから落ちても平気らしいが、主人公が体験している話だと絶対そんな強度はない、らしい。右肩のあたりから白い羽が出せる。3本が限界。

気、および魔力は有る事には有るが使えない。

外見：赤い色の髪で、魔法世界の森に居る時はかなり長かつたが、麻帆良に来る時に肩の辺りまで切り落とした。

本人はまったく気付いていないが表情に乏しくなっている。

言葉も戦闘中にテンションが上がっている時だけ普通に話せるが普段は片言。

顔は前世ほど強面ではなく上の中くらい？

服は今の時点ではタカミチに買ってもらつたタンクトップと動きや

すい長ズボンしかない。

好きな物・食べ物（特に甘いもの）・睡眠

嫌いな物・面倒事・面倒事を押し付ける奴・話を聞かない奴・十字架？

その他・何かと不幸でその不幸は天使の魔力での転移も搖るがすほど。ちよくちよく迷子になつたりもする。

他にも森に居たせいか若干感覚が麻痺している所もある。種族は人間だと思うが龍宮さん敵にはありえないと全否定される。

使い魔？としてレイという小さい黒龍を連れている。大概頭の上に乗っているのだが、現在2・Aに捕縛（？）中。

技：感謝の正拳突き・眼にも留まらない速さで正拳突き。直線状100m程なら拳圧が届く

超チョップ・物凄いチョップ。

主人公オリジナル・不幸拳法

サンテントウリツ
参天鬪立・最初に鳩尾に肘打ちしてから裏拳で顎の先端を揺らし、最期にボディーブローをし立ちながら気絶させる技。

シンシンシンケン
真神震拳・拳を振動させながら腹を殴る。内臓に直接響く。

渦巻伸打・詳細は良く解らないが行き成り敵の前で回転して、回転終わつたら敵がぼこぼこに成つてゐる。

琴紺冠・肺に手の甲で攻撃し、その後脚払いで体制を崩し、転びそうになつた所で米神に肘撃ちするえげつない技。

ウロボロス・唯一力タカナ。肉体強化の方法、詳細は不明。

戯護喰・三国志に影響されて命名。ウロボロス発動時に出来る。こちらも詳細は謎。

その他増えるかも？

では本編

side無音

レイが居なくなつた件。

まあ、タカミチがたぶんこのかちゃんだらうつて行つてたから虐められたりはしないだらうけど・・・

ん？いや、虐められるの心配してんじやなくて虐めるほつ心配してるんだよ？

アイツ火噴くし、爪無駄に鋭いし、力も無駄に強いし。

まあ、それを言つたらタカミチが信号みたいに顔色変えて面白かつたな。

で、今学園長室に居ます。

「…………以上が広域指導員の仕事じゃ。後これが広域指導員の証明書じゃ。」

「…………まあ、省略すればテキトーに歩き回ってヤンチャしてる奴を潰せ、と言つていいわけです。

「解つた。喧嘩してる奴、潰す。」

「…………手加減してくれるとうれしいの。では高畠君。今日はHRだけじゃったな?少し具体的に説明と学園の案内をしてやつてくれ。」

「はい、解りました。」

「…………俺もですか?」

昨日の件で気まずいんだが…………
でもレイが吸血鬼とか昨日の一人とかピヒロちゃんに何かされてもいやだし…………
ううへん、悩み所だ…………

「それにしても、その格好はどうなのがね?」

「む、普通の服。これしか、持つてない。」

「ま、今の時期じゃしのあ。大丈夫か。」

こっち来る時タカミチに買つてもらつた。
暑そりだつたからタンクトップとズボンだ。

あいにくとそんなに買う余裕もなかつたからこれしかない。
まあタンクトップといつても腕は包帯で隠されてるから別に良いと

思つ。

と言つか今の時期？

それにホームルームだけ？何故だ・・・今日の田付せぬ出の前に確認出来なかつたんだよなあ。

でも6月だつたな。何かあつたつけ？

「無音君、着いたよ？」

「む、いつの間にー？」

「二つの間に、つて黙つて付いて来ていたじゃないか。」

むう、集中しそぎて気付かなかつた。

『ピチャウーー。』

『ああ、どうしたん~？』

『ああ、あつち飛んでつたー！』

『私がリボンで・・・』

『そんな事したら可哀想でしょー。』

『ゆーなーそつち行つたよ』

『へ?え、ひょ、わわわー?』

『おー、どうすれば良いんだ。龍田。』

「いつそ麻酔銃で

レイが危険だ！危険すぎる！！

あ、ちよ！待つてくれ無蓄君！」

「レイ！」

卷之三

レイが俺の胸に飛び込んできた。

なんて事をするんだまつたく・・・・

「あ、さつきの喋り方が変わってる人・・・」

「あ、おにーさん。ごめんなー?返す前に行っちゃったから返せへんかったなんよ~。」

・・・・後先考えてなかつた。

• • • • •

「ねえねえ、その鳥みたいな子なんて言ひのっ。」

「かつこいい。年いくつ~?」

「彼女は~?」

「タカミチ・・・・た、たすけ・・・・」

「ハハハ、皆。とりあえず席に付いてくれるかな?」

「ジ、地獄だ。嫌だ、怖い。テンション高すぎ。」

それ以後ろの方で俺に向かって敵意むき出しの人が一人も居るんだ。
あと吸血鬼さんが「コツチを興味深そうに見ています。

タカミチ、俺あなたの事尊敬するよ。良くこのクラスをまとめられるなあ・・・・・

そんなこんなで俺は端っこで傍観している事に。

む、アレが幽霊ちゃんか。コツチ見てるな、手を振つておこひ。

驚いてる驚いてる。

「えーと、今日から本格的に麻帆良祭の準備だから怪我しない程度に楽しんでね。

この間の話し合いでは決められなかつた出し物についても決めるよ

う。」

「「「「「は~~~~い!~!~!」」」」

「それと彼は今日日付けで広域指導員になる子だ。無音君自己紹介を

「うつへえ、しなきやいけないの？」

「滝音 無音、16歳、よみじゅ。」

「僕達は少し仕事の話が有るから気をつけて準備に取り掛かってく
れ。」

「じゃあ行こうか無音君。」

「解つた。」

「ふう、やつと開放された。」

「ペヤウー。」

「おお、お前もうれしいか。よしよし。
それについても麻帆良祭か、今年は何事も無いだらうつし楽しむとこよ
うかな？」

side 刹那

昨日負けた奴がウチのクラスに来た。

高畠先生の知り合いだったのは本当だつたらしく。

・・・・・ いつか謝らなくてはいけないな。

ふむ、しかしどのタイミングで謝つたものか・・・・・

龍宮に相談してみるか？

今はちよつと準備するために立ち歩いているから弱て良いだらう。

「おこ、龍宮・・・・・どうした？」

「へ？あ、いや。なんでもない。」

「・・・・顔が少し赤いぞ？熱か？」

「そんなんじやない。大丈夫だ。」

・・・・?

まあ良いか。

あれ？何を聞こいつと思つたんだつけ・・・・

まあ後で良いか。

s i d e 龍宮

あれが昨日の？

いや、でも、昨日ほど機械的ではなかつたな・・・・
さつきの竜種を撫でている時に笑つたし・・・・// / / / /
ま、まあ、悪い奴じやないんだろうという事だけ覚えてくか。

龍宮は知らない。ギャップ萌えという言葉を・・・・
これがそれに当てはまるかはまた別で。
まあ、最初の邂逅が戦闘、しかも感情がまったく無いと思つていた
相手が、その決して悪くは無い顔で優しく微笑んだら少し気になり
はするだろう。

s i d e さよ

・・・・さつきの人、私が見えてた？

これまで沢山の靈能力者的人が来ても見えなかつた私が・・・・
また会えるでしょつか・・・・・

s-i-d-e無音

「まあ、とりあえず今見たいな感じで良いからね？多少手荒かもし
れなけれど。」

「解った……」

すっげー、やつぱつえーなタカミチ。

喧嘩している大学生の団体もん無傷で2分くらいで鎮圧とか。

「じゃあ、今日は」れくらいかな？僕はこれからさつきの教室に戻
つて連絡事項とか言わなきや行けないから戻るよ。じゃあね

・・・行ってしまった。

まあ良いや。世界樹、一度近くで見てみたいな。
よし、行つてみよう。

「と言つ事で、来た。何しよう。」

・・・・・独り言でも片言とかwww
はあ、自分で行つて悲しくなるな。
しかも道中色々あつてもう夕方ですよ？
俺の精神HPはゼロです。

「ペザロー。」

「ん？腹減つた？じゃ、帰る。」

「まあ良いじゃあないか。そんなに慌てずとも、今夜は満月。月見

でもしてから行つたりびつだ? なあ、**サリマツ**。 「

「つー? (接近に築かなかつたー森での生活でそいつの敏感に成つたのにー) 「

「氷爆!」

「翼よ、3対出でよ。」

黒い翼と白い翼が3本出てきて自分の前で交差し、それに包帯で補強をし防御する。

「ほう? なんだその翼は。貴様も人外か? 烏族・・・いや違うな。鳥族の羽はそんなんじゃない。」

くつー翼が凍る!?

一回消すか。

「消失も自由自在。

人間ではないのは明らかだが、何だ?
それにその包帯の魔法具・・・
フハハ、久々に面白い!」

「俺、面白くない。早く、帰る。」

「わつはさせないぞ。茶々丸!」

「了解しました、マスター。」

「えー? 二つの間に!」

ちつー集中だ！

「レイ、どつかいけ。」

「ピギヤウー！」

レイが戦闘範囲外に出ていくのを確認して、俺も走り出す。

メカ娘がこちらに突きを入れて来る。

流石機械。するどいな、ためらいが無い。

それを少し手を添えてそらし、自分も攻撃を繰り出す。

むう、当らない・・・

ゲームで言う中ボスか！

「くつ！真神震拳！」

よし！入った！！

・・・でも口ボに効くのか？これ。あ、吹き飛んだ。外装も削れ
てるな。よし、成功だ！

「氷爆！！」

「う、おー？」

俺はとっさに横へ飛び避けた、が

ビイン

「糸ー？くつー！」

脚をとられた。慌てて包帯で糸を切る。
しかしその動作を行つた時目の前に吸血鬼さんが！

「フンッ！！」

「くつ！」

たかだか十歳程度にしか見えない女の子の力じゃないよな？これ。
攻撃してもいなされ。攻撃される時は懐から当てられる。
此処まで身長差があると超接近戦は不利だ！

「我が必殺！参・天・鬪・立！！」

決ました！

と思った・・・・

「くつ、今のは危なかつたな。しかしえげつない技だ。今の力加減
だと立つたまま気絶するぞ？」

「そう言つ技だ。」

「しかし、私に勝つには鍛度がまだまだだつ！！」

回し蹴り！？

「ちいっ！！」

慌てて防御しようとするが間に合わない。

いや、間に合つ！

片足立ちになつているほうの足を払う。

「むつ！」

- < \! > ! -

よし、
耐えた

卷之三

一、渦巻伸打！」

なんじゅそりゅー！／＼ー！むー！ー！ぬあー！？」

うな超筋力で、だ。 防御しているが連打に続く連打。 しかもアツパーで龍を撃墜するよ

「ちつ！氷爆！！」

「翼よ、3対出でよ！」

「ふん、やるではないか。最弱状態の私とは言え此処まで戦えるとは……」

「なんで、俺、襲う。」

「あのジジイに頼まれてな。個人的にも興味が出たからちょうど満月の夜に襲撃したんだよ。」
実際、面白いものを見つけた。」

うつは）、物凄い笑顔です。

「ふん、おいお前明日放課後また此処に来い。強制だ。茶々丸、大丈夫か？」

な、なんか無理やり約束を取り付けられてしまった。
く、くそう！すっぽかしてやる！！

まあ、御人好しの主人公にはできない事ですが・・・

不幸人は御人好し。

S i d e 無音

今日の放課後は吸血鬼に拘束されてしまったので、それまでどうしてようか・・・・
とりあえず見回りするか。

「んだ、ゴラア！俺たちに喧嘩売ろううつてのかあ！？」

「先に手え出して来たのはそつちだらうがあーー。」

・・・俺の仕事は～、取り合えず～喧嘩している悪い子をー

一ツ
ブ
ス

バキッガギャツゴシャングシャメキツドゴツ！－！－！－！

「アリが二つなります」

うんうん、素直でよひー。

『なんだやるつてのかあ！』

お、あつちでも
いや～、ストレス発散こちよつび良いねえ

・・・
5時間後

・・・
午前中だけで9回?

あれ、今日つて平日だよねえ?
何でこんな歩き回つてるの?

「飯、食いに行くか。レイ」

・・・・・・・・・・・・・・

「・・・ん?レイ、居ない?」

ヤバイ、なんか嫌な予感が・・・
どこへいったんだ?

sideタカラナ

「・・・・と、直つわけでもの訳はいつなる解つたかい?」

「「「はーい」「」」

「ハハハ、じゃあ次に・・・・」

「ギャウー」

・・・・疲れてるのかな?レイ君の鳴き声がしたぞ?

「あーーー!なーだの子だ。よしよし、いひあひでー。」

「あれー?レイくん、どひしたん?無音さんまー?」

「ペヤウ」

・・・・無音君。またなんかあつたのかい?
ちやんと見ていてくれなきや困るんだけどなあ・・・・

キーンコーンカーンコーンシー!

「む、じゃあ、今日の授業は終わりだ。出し物、早く決めないと間に合わなくなつちやうからね?
さて、レイ君、無音君のところへ帰るよ?」

「ペヤウー」

僕はレイ君を持って教室を出て行く。
さて、彼は今どこに居るだろつか・・・・

side無音

さてさて、レイがどこに行つたのか解らんが俺は腹を満たし、見回りを開し、午後で4回と言つ喧嘩の検挙率

治安が悪いねえ。

・・・・あのクラス行つてゐるのかもなあ。なんだかんだで木乃香ちゃんには懐いてたみたいだし。

「行つて、みるか。」

そして1・Aに赴いた訳なのだが・・・・

「何で、1J一なる・・・・」

「ハハハハハ、良いじゃん良いじゃん。チョット見てつてよ。」「レイ君は高畠せんせーが連れてつてもーたから少しひらりと大丈夫や。」

「やうやう、学祭近いからちよつとしたリハーサルよ。」

「そうそう、健全な女子中学生達の必死で選んだ物なんだからー。」

・・・・それで何故『ドキッ 女の子だけのコスプレ写真館』なんて言つ選択肢になるんだ? よーするに好きなコスプレして写真とつて終わりだろ?

「ほらほら、ここから好きな子とその子に着せたいコスプレ選んで! あー、名前解んなかつたらテキトーで良いよ。二人位選んじゃつて。」

「

ふむ、やつ言つことか。

最近原作知識薄れてきてるから名前は覚えてても顔が解らない。

エヴァはやめとこう。

・・・・ん？那波、つて人誰だっけ？ま、この人で。

む～、後は・・・・・龍宮？あ～狙撃手さんか！あの時遠くてよく見えなかつたからこの人で良いや。

服・・・服ねえ。ぶっちゃけ言つと服の名前も殆ど覚えていない。

スク水？ブルマ？メイド服？バニー？猫耳？何の呪文だこれは・・・

で、でもこのクラスの事だ。変な服が混ざつていてもあまり不思議じゃない！

さてどうする！？

「」で断るという選択肢が出ないというのが流石ですか？

・・・む？なんか聞こえた気がする。

「どうすんの？」

「う、じゃ、この人とこの人、これとこれ」

「・・・・・・へえ、無音さんホントに知らないで選んでるの？

つーか服装もマニアックだわー。」

初日にインタビュ―してくれとせがんで来ていた子が何か言つている。

？？？？マニアックってなんて意味だっけ？？？？

「あ～、ホントに解つてないのねえ。つていうかホントに年上？なんか小さい子相手にしてるみたいなんだけど・・・・」

今度はメガネの子・・・の子は男にとつて敵な気がするぞ！

「よし！準備完了！――」

「ぐ、何だこの巫女服は！？明らかにたけが短いだろ？！」

「あら、何でセーラー服？」

ダツ！ 無音が逃げる音

ガシツ！ パバラツチ、男の敵に捕まる音

ドンツ！！ 二人の方に押し戻す音

パシャツ！！ [写真をとられる音]

「いやーこんな感じなんだけど、ビツッ！」

「／＼／＼／＼／＼／＼」

か、顔が熱い！見てることちが恥ずかしい！

つーかなんでこうも簡単に着せられてるんだ！一人ともお！――

「・・・もしかしてどんな服か知らなかつた？」

「ずっと外国、居た。知る訳、ない。」

「おー、そつかそつか。それにしちゃ実に的確なチョイスだつたらさあ。

あ、そうだ！ほい、[写真。」

・・・地味に上手いのが気に食わない・・・

しかもどんな技術か知らんがなぜかそれぞれ俺と龍宮、俺と那波のツーショットになつてゐる。

「俺、レイ、探し、行く。」

「当口も来てね？」

是非ともお断りさせていただきつーと、世界樹でエヴァとの待ち合わせか。つーかアイツは準備しないのか？

「まあ良い。走る。」

この日、世界樹の方向へと向かう道路で車をやすやすと抜かしていく少年が目撃されたと言つ。

side ハグア

「まつ、ちやんと来たか。」

「用、せつせと済ませる。俺、レイ、探す。」

「ふふん、レイとはこいつの事か？」

「ピヤウーーー！」

私は得意げに茶々丸のほうを指差す。

たく、あのチビ助め。無駄に強いから手間取つてしまつた。タカミチはアツサリ不意打ちでどうにかなつたがな！

「さあ、コイツを返して欲しければ私が本気で戦える場所で勝負してもらおつか！」

「・・・悪党」

「ふ、何とでも言つたら、口元、ペチャパイ、カベ、チビ、貴様あ！
！喧嘩売つてんのか！？」

「売つてきてるの、そつち。」

「むぐつ！確かに、ふ、ふん！まあ」いつを軽く負かせば住む事だ！

「さあ来て貰おうか。我が別荘に！」

フハハハハハ！久しぶりに本気を出してやる！

s i d e 無音

うざい うざい ひたすらうざい。

まあ、そんなこんなでエヴァの別荘の海岸に居る。

「レイ、返す。」

「ふん、私に勝つたなら考えてやらんでもないだろつ！
リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！『氷神の戦槌』！……」

・・・・俺に氷玉が効くとでも思つてんのか！

「超チヨ~~~~~ップ！-----！」

バシャアアアアアアアアアアン！-----！

「氣も魔力も使つていないのでこの破壊力か！？くつ！茶々丸！
リク・ラク・-----！」

む、來た。

「お相手していただきます。」

鋭い突きが顔に迫る、それを俺は勢いを殺さず掴み投げる…！

「ケケケ、ヤルジヤネエ力。」

「む…？」

チャチャチャゼロさん！？何でいんのかなあ！？
俺は思いつきりしゃがみ、殴り飛ばす。

「フッ！完全詠唱だ、効くぞ？『凍てつく氷棺』！…！」

！？下からの威圧感が半端ない！

「羽よ！」

バサア…！

パキヤアアアアアアン…！

「む？」

あ、アブネツ！？何じゅそりゅーギリッギリだ「よみ見してて良いのか？」・・・ぞ

「オオオオオオオオオオ！？」

光の剣が通り過ぎた……マトリックスのよつて体をそりして避ける。

「ケケケケ！「ツチもまだまだいけるぜ？」

「ツ！」

そうすると脚を狙つて斬りかかるチャチャゼロ。
俺は脚を上げた……ん？これじゃ次の攻撃避けらんなくねえ？いや浮いてるし。

「すいません。」

「ド」オオオオオオオオン！－

「ゴハツ！？」

ゞ、ドロップキック。み、見事。……でもわあ。もう、めんどくさいや。終わりにしようか？

「ほひ、まだ立つか。」

「ウロボロス……」

「「「「」」？」

「戯護喰」

キュイン……ツ「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

！－

「避け、
られた。」

「ハア、ハア、ハア、くつか、なんだそれは！？広域殲滅魔法にも劣らない破壊力だぞ！」
ゲートを開くのが遅かつたらチリも残らんだろう！手加減と言つモノを知らんのか！？」

「ん？」

俺は技を出した方向を向く。

海も道ができるて いる・・・・あ、今なくなつた。

「説明、いる？」

「いに決まつてゐる……!」

決まっているんだ・・・
じゃあ、じゃ、説明ターミーム!

まず、俺の方に埋め込まれている天使の力と悪魔の力。

い力だ。

の代償で力が働いているのだろうと考えた訳だ。

そして慣習で触るようになつた 気 魔力 この二つが暴れた後と 前とでは量が違つていたのだ。

「志」にはこの石は天使の石で、が魔力、悪魔の力、らかのエネルギーに変換している。と言つ事だ。

そこで、無理やり必要以上の量を流し込んだりどうなる？

そう思つて試行錯誤しやつてみたらあら不思議。

回復力は上がるし、破壊力も凄い事になつた。

まあ、こんな感じで・・・

「解つた？」

「・・・・・片言で解りにくかつたが要点は捕らえた。」

「へ？片言じゃなかつたじゃんつて？言葉と思ひは・・・いつでも違うものなのぞ・・・・

はい、すいません。ちょーし乗りました。かつこつけました。

「しかし、お前、その石はまさか・・・だから包帯を巻かれていて、しかも捨てられたと聞つのか・・・・

あれ？俺の嫌いなシリアルスムードの予兆が？
へ？なぜ？なぜ？

「お前の世話は私がしてやるー困つた事があればここに来るが良い・
・・・」

ナンデダアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアー！？

俺は訳の分からぬまま家路に着くのであつた。

s i d e H ヴア

くそつ、胸糞悪い！

まさか凄い力を持つた面白い奴が来たと思つたら、変な石による力
だつた。

大方魔法世界の組織が仕組み成功ではなかつたので捨て去つたのだ

るつ。

それか、私のように殺してきたか・・・・・・

言葉が達者でないのも下手したら私より酷い境遇なのかも知れんな。

「・・・・ふん。」

「ケケケ、ゴ主人ガヘタレ顔ニナツテヤガル。丸クナツタモンダナ。

」

「マスター、悲しそうです・・・・」

「む、うるさいぞ貴様等！ええ～い！チヤチヤゼロ逃げるな！！茶
々丸もネジ巻いてやるぞー！？」

意外と優しいエヴァンジエリンさんでした。

不幸人の試験。

s i d e 無音

今日はなんか知らないけど世界樹前に呼び出された。

「ふおふおふお、来たか無音君。」

ここに来た日に攻撃してきた生徒達が居る。大方魔法関係者なのだ
るづ。

「用事、なに? レイ、居ない。」

そう、あの後タカミチを探しても居なかつたのだ!
まったく、あのデスマガネ何処に行つてやがるんだ・・・・あ、居
た!

「ああ、レイ君だったらこじだよ?」

「ペヤウ! -!」

「さて、知つている者たちも居ると思うが、滝音 無音君じや。

高畠くんが出張の時に連れてきた孤児じや。これからはここ、麻帆
良学園で引き取る事になった。ここに来る前は魔獣がすむ森で生活
していたので戦闘に関しては問題はない。

そう言う訳で夜間警備の一端、及び広域指導委員の役割をしてもら
う事になった。 「

おーおー、ざわついてるねえ。つーか俺は夜間警備の了承は出して
ないんだが?

「終いにやその無駄になげえどたまかち割つて喰ひりひだ？」

「まあ、力量を見てもらひたためにも高畠君と戦つてもうおつか。」

えへ、『スメガネさんと戦つテスか？めんどくせえへです。

「おー、無音。『アレ』は使つなよ。」

「む、念話？」

「む、了解。」

「やついえば、どれくらい強いか知らなかつたなあ。」

「つまへ、ヤル気満々ですよあの人。

「行く

「よし、いいよ。」

集中、しる。

相手の攻撃パターンは知つてゐる。

俺は大きく一步を踏み出す。

それを迎撃するかのよつに来る空氣の塊。

なるほど、これは痛そうだ。

5個、前から不自然な空氣の流れがこちらに来ている。それに合わせて自分も拳を振り切る。

パパパパパン！！！

「ほお」

參天鬪立

・・・ 気絶しない、凄いなあ。

俺はその言葉に力を任せた。喧嘩が飛ばない

「くつ！？ 濃い力だね。 気も魔力もまったく使っていないし。」

「生れれつや」

「それはそれで怖いよッ！！！」

さつきより沢山撃つてきた。数が把握できない。

かか
俺は素三が何いふなに事を云ふに知らぬ

包帯が伸び俺の前に壁を作る。

「それだと上ががら空きだ。」

た、タカミチがとんだあ！？

「ぐ むう！？」

マシンガン見たいに撃つべきやがつて。

さて、俺に今足りないのは？

連射で敵の遠距離攻撃、もしくは「」の連撃を一気に払いのけられる範囲攻撃。

その答えは？

バサアー！！

「つ！いやあ、最初に会つたときに遠目で見たけど。これはまた綺

一対だけ翼を出す。
右の翼で攻撃を払いのけ。

一気に二つの羽を広げ上昇する。

「於血刃羽」

羽が凶器のようにタカミチに向かつて行く。

「？」

砂埃で見えなくなつた。

トモイギ

ドオコオオオオオオオオオオオン！

オレハフキトバサレテイタ

side タカミチ

くつ、最後の攻撃は凄かつたな。いや、その前の攻撃も凄かつたんだが。

最後の最後に本気を出してしまった。

「はあ、はあ、大丈夫かい？！無音く・・・・」

「・・・・ウロボロス」

彼は何かを呟いた。

その時、彼から使っていないが辛うじて感じられていた『氣と魔力の力が完全に消えた』

「つー？く、理性が飛んだか！！おい、タカミチ 一旦本気で沈める！！」こら辺一体更地になるぞ！！！おい、じじい！ぼさつとしていないで止める準備をしろ！結界を張るなりアイツに攻撃を加えるなり出切る事をやれ！」

彼の背中に翼が増えた。

それが周りの狙撃や魔法を弾いている。

「足りない、速さ？力？いや、手数。技が少ない。なら作る。何処までも追い、戦える力を」

彼の肩の部分が光る。

「豪殺・居合い拳！――！」

しかし彼は止まらない。

「どんなに追い求めて力が足りないのなら。」

「モウソウ」

エヴァが焦りながら無音君に攻撃する。しかし効いていない

「何処までも上り詰めよう。」

「そこに力の答えが有るのなら。」

これは、詠唱なのか？

「立ち昇れ翡翠泉、落ちろ水晶星、切り裂け緑柱石刃」

彼から出される光が広がろうとしている。

「照らせ紅玉、鎮めよ蒼玉」

「させないよー！豪殺・居合い拳ー！」

「△△△！」

光が消える。コントロールを失つたみたいだ。

「雷光劍！！！！！」

「むっ……」

「雷の暴風……」

「ぐうっ……？？？？」

周りから攻撃が加えられる。

「うううあああああああ……」

「終りだよ。」

パン！

・・・・撃つた？

「た、龍宮君……？」

「ただの麻酔弾だ。心配しなくても大丈夫さ。それに、せっかく面白そうな人が来たんだ。みすみすそれを逃したりはしないさ。あつちもそうみたいだからね。」

彼女が指をさす方向を見てみると・・・

「まったく、お前はチョット強い攻撃が当たつたくらいでなんだ！
後で家に来い、鍛えなおしてやるぞ！……」

「う、森居たら、攻撃されると、手加減できなくなつた。仕方ない。

「

「そんな言い訳通ると思つてゐるのかあ……。」

「ペヤウ……」

「…………レイまで、怒つた。」

はははは、ああして見るといざっぱりまだ子供だなあ。

「ふおつふおつふお、まあ今回はトラブルがあつたが実力の程は解つたじやない。それでは今日のところは解散じやー。」

ちなみに・・・・

「無音君。やつきの技つて発動していたら威力ビザレハ变成つて
いたんだい？」

「…………たぶん皆死んでた？」

「んなもん無意識のうちに出すなーーー！」

「ガフツー?」

止められてよかつた。

本当によかつた！

そう心から思い冷や汗をかくのであつた。

翌日夜

「無面さん…そっちに行きました！」

桜咲が叫ぶ。

「超チョップ…！」

ズバン…！

『なんなんやあの兄貴さん！チョップでスパスマ斬つてぐるで…？』

そんな事を言つてゐる奴も龍宮の狙撃で還される。

「…・・・終わり？」

「はい、やつたのでいいの地区の討伐が完了しました。」

『ふふふ、意外と楽だつたな。』

・・・・討伐、か。

モンハンがやりたくなつて來た。今度のお給料で買おう。

『ふむ、私も買おうかな？』

・・・・サイゴメトリー…？

『ふふふ、そんなんじゃなこさ。』

「悔れない。」

「…………あの、何の話をしに来んですか？」

「…………ん？ 察しや」

「はあ？」

…………むへーの『気配』…………

「わや、帰つて良い。」

「はー、ではお疲れ様です。」

『じやあお殿をかじりつぶす。』

・・・・・行つたか？

そと

「『』の間の技、ちゃんと最後まで発動したい。出て来い。」

「おや、気がつかれていましたか。」

上位の悪魔かな？

「どんなに追い求めても力が足りないのな。」

「何処までも上り詰めよう。」

「そこに光があり、闇があるなら、それはある。」

「力の答えは見えるはずだわ。」

「何をするつもりかは知りませんが止めさせていただきましょう！」

殴りかかってくる悪魔。

「立ち上れ翡翠泉、落ちろ水晶星、切り裂け縁柱^{石刃}」

でも俺のほうが早い。

「照らせ紅玉、鎮めよ蒼玉

終わりだ。

ホウギョクシンカ
宝玉神歌

・・・・・

翌日、一晩にして森から木が半径1キロメートル単位で消えていたのがニュースになつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9447p/>

不幸で不幸な不幸人

2011年1月30日19時45分発行